

昭和村人物伝(3)

綿貫 六助

陸軍大尉の異色作家

『利根沼田の人物伝』(高山正著)掲載の、昭和村に關係する人物の中から今回は陸軍大尉の異色作家、綿貫六助を紹介する。

綿貫六助は明治十三年四月八日、久呂保村森下に生まれた。文才があり、東京の文学雑誌に投稿して入選したことがある。

当時、軍人志願熱が高かった青年の例にもれず、六助も青雲の志を抱き独学受験して陸軍教導団に合格、郷土を十七歳で後にした。赴任先は、仙台青葉城下連隊で少尉に任官。日露戦争では満州に転戦し、負傷して殊勲の金鷄勲章(武功拔群の軍人に与えられた勲章)を受けた。

大尉に任官した六助だったが、年来(年ごろ)の文学生活を夢みて、あえて自ら陸軍を去り、東京の早稲田大学英文科に三十四歳で入学。すでに妻を迎えて二子をもうけていた。しかも、この決意をしたのは文学愛好の結果とはいえ異例であり、当時、陸軍大尉の学生として早稲田で評判だった。大学卒業後に文筆生活を始め、日露戦争の体験を基にした長編小説「戦争」を著し、当時文壇で評判と

なった。

「靈肉を凝視(み)めて」も戦争作品であるが、純文学的な立場から、戦争否定、ヒューマニズムの立場をとり高く評価された。

最も活躍したのは大正中中期から、昭和初期にかけてであり『中央公論』とともに文壇の権威的雑誌だった『新潮』などに多くの作品を発表した。その後『毒茸』ある狂人』など、次第に私小説的な傾向の作品を発表した。昭和初期に入ると郷土的な作品に筆を染め、『磯茂左衛門』(朝日新聞連載)を発表した。交流のあった郷土の児童文学者・おのちゆうこうや、歌人・生方たつるには経済的援助を受けていた。

戦後は不遇で、居所もわからなかったが、昭和二十一年十二月十九日、六十六歳で生涯を閉じた。上州人らしく、熱情肌で権威に媚びなかつたため世渡りが上手でなく生涯清貧、家族は不和だった。芥藤緑雨が『文人陋巷(ろうこう)に死するは之又本懐なり』という不遇の生涯を終えた。『故郷の山川走る汽車の窓思い出しげし夏の草原』昭和三年の夏、上越線で郷土森下を望見したときの六助の述懐(じゆわい)である。

昭和村ボランティアガイドの会

事務局長 島田 民夫



地域包括支援センターだより

9月21日は『世界アルツハイマーデー』

認知症になっても安心して暮らせる社会の実現に向け「国際アルツハイマー病協会」(ADI)は1994年、世界保健機関(WHO)と共同で毎年9月21日を『世界アルツハイマーデー』と制定しました。

また、9月を「世界アルツハイマー月間」と定め、世界で認知症への理解や家族を支援する活動を行っています。



認知症は、誰でもかかる可能性のある身近な病気です。だからこそ、本人や家族だけでなく地域全体で助け合い、支え合っていくことが大切です。ぜひ、この機会に認知症について考えてみましょう。

お気軽にご相談ください!

◆昭和村地域包括支援センター

☎20-1126 (昭和村社会福祉協議会内)

認知症ケアパス「もの忘れが気になる方へ」

ご自分やご家族の「もの忘れ」が気になったときや認知症になったときに相談できる窓口や症状の進行状況に応じて受けられる支援をまとめた冊子を配布しています。

QRコード
をご利用
ください。



◆群馬県認知症疾患医療センター内田病院

☎24-5359 (沼田市久屋原町345-1)

「もの忘れが気になる、診察してほしい」。そんな時には、まずかかりつけ医に相談しましょう。状況によっては、認知症に関する鑑別診断や専門医療相談を行う『認知症疾患医療センター』と連携します。



問合せ 地域包括支援センター ☎20-1126

